
自由のツバサ ~ loneliness in god blessing ~ **連載バージョン**

飛焰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由のツバサ ｛loneliness in godble
ssing｝連載バージョン

【Nコード】

N8937D

【作者名】

飛焰

【あらすじ】

自由のツバサ（短編）の連載タイプです。誤字を無くして見やすくしたタイプです。庵君のお話し……みてください。エピソードから始まりプロローグで終る奇異なお話し……4部構成です。エピソード 前編 後編 プロローグとお読みください

エピソードだけど、始まり

自分は何時も1人だったと思う……
誰も信じれなくて。

誰からも期待されず。

誰も本当の僕を知らない。

本当の僕は……こんなに笑ったりしない。
偽りの僕はただ愛想笑いとかするだけ。ただの演技だ。
そんな僕の何が良いのか？ 多数の女子から告白された。
どれも断ったけど。
誰も表の僕しか見えて無い。都合のいい所しか見えてないんだ。

形だけの友人。煩いだけの先生。
どれもが、本来の僕を知らない。
本来の僕は、優しい人なんかじゃない。
心にいつも……

兄貴に対する嫉妬の感情があるからだ。

そんな自分が醜かった。
自分でも僕は馬鹿だと思う。

僕はただ兄貴の影を背負って行くだけだから……
兄貴が凄いのは分かる。
だから憎いんだ……より一層に……。

今回もまた……

兄貴の賞をただ眺めるだけなのだ。

前編

『八神の落ちこぼれ』

それが、世間が抱く僕に対する目だ。

父親は大財閥の総帥。

母親はフィギアスケートのオリンピックの金メダルの常連選手。

長男は親父の会社を継ぐ事になる技量がある。

長女は大病院の御曹子の息子との結婚が決まった。

それぞれがそれぞれの道を進んでる。エリート道を……次男もだ。

兄貴はピアノの道を進みだした。今では金賞の常連だ。

そうして僕……僕は何も長けている物がなかった。

兄貴より僕はピアノを前からやっていた。

5歳から……高校2年に至る今まで……ずっと……。

でも、賞は1つも取った事がなかった。

いくら練習しても。

いくら楽譜を繰り返して見ても……。

1つも賞を取ったことがなかった。

『才能が無いんだから止める』皆が皆、僕にそう言う。

僕は何回も……何回も……幾度も。

苦虫を啜っていた。

誰からも期待されず。独学でピアノをやり。何度も土下座してコンクールにだしてもらった。
しかし……結果は惨敗。

当初は先生が居なかったからだ。と、何度も自分に言い聞かせていた。

できない子に講師をつけるほどウチの親たちは甘くなかった。

ある日、どういうわけか、兄貴もピアノをやり始めた。

初めてのコンクールでいきなり金賞。

それから、コンクールがあるたびに兄貴は金賞を取っていった。

『天才現る！』新聞の見出しに3冠した次の日の新聞に載った。

兄貴にピアノの講師がつけられた。

僕にはつけないで……。

何度も悔しい思いをした。何度も何度も何度も。

僕はアイツの影に隠れていたのだ。

スボット

光を浴びる兄貴。

その影で光を憎む、『闇』が本来の……

本当の自分だから。

????

もう、夕方か……。

音楽室から外の夕日を見る。

野球部やサッカー部の声が聞こえてくる。

僕は起き上がり、外の夕日を眺める。

眺める事しか僕はできないのだ。

僕は……何時だって

「僕は……」

ピアノに目を向ける

床には、楽譜が散らばっている。

僕がやったものだ、自分の才能に嫌気が注して。

ピアノも、兄貴からもオレは逃げ出したんだ。

もう、なんでピアノを始めたか分からなくなった。

練習用のピアノも兄貴に取られ、僕には学校の音楽室で練習するしかなかった。

「……………」

今、ピアノを止めたら……僕には何も残らない、全て、消え失せる。

今までの時間も。苦勞も……そして涙も。

何もかも……全て。

悔しい悔しい悔しい悔しい！！

凄く悔しかった、僕の有一の趣味であったピアノも夢でもあった金賞も全て消えるのだ。

何年も努力して努力して……何回もやったピアノを止めようと思った自分が憎かった。

悔しくて涙が止まらなかった。

最後に泣いたのはいつだったろうか。

兄貴に初めて賞を取られたからだろうか？

水が楽譜にポタリと、落ちた。
止めようと思っても止まらなかった。

これで、ピアノとはおさらばしよう。
半泣きの状態でピアノとやっと、向き合う。
引いてみればわかる。10年以上の『無駄』な時間の結集を。

適当に楽譜を拾い立て掛ける
そうして、ピアノと最後にもう一度向かい合い、鍵盤に指を駆け巡らせた

引き終わった……。

自分でも思う、兄貴なんかこの何万倍も上手いじゃないかよ。
涙も止まり、落ちていた楽譜を拾おうとしゃがんだ時のことだった。

「キャッー!!」

ドスン! と、音を発てて誰かが倒れてきた。
泣いていた事を知られなくなかった。だから倒れてきた人を見ない事にした。
多分目が赤くなってるだろう。

「イタタタア? あ! スミマセン!! 邪魔ですよね!! 今、出て行きますから」

声からいって女性だろう。

「いいよ、別に」

最初は、自分でも何を言っているか分からなかった。

そうか、暫らくして気がついた最後の最後……。
自分でも未練がましいと思った。

最後は……観客が居る前でピアノを引きたかった。

「僕の、本当の最後の演奏だから……聞いてくれないかい？」

笑顔で僕は彼女に向かいそう言った。

適当な楽譜を掴に椅子に座り直す。

集中する。最後で観客が居るから失敗したくなかった。

告別式……だから。

鍵盤に神経を集中させて、鍵盤を叩く。

ポロン　と、綺麗な音色で演奏を終える。

こんなヘタクソの演奏よりコンクールへ行って聞いた方がいいであろう。

特に、兄貴の……。

席を立ち、楽譜を拾おうとした時だった。

パチパチパチ……と、大きな拍手が音楽室に響き渡った。

「凄いよキミ…… 凄く音色が綺麗……」

「凄くなんかない」

「イヤ！　それが凄いんだよ！　それはね、誰にもできるってな物じゃないんだよ」

「練習さえできれば、誰にだって……」

できるさ、僕なんかより上手にね。
そう言おうとしたが言えなかった。
彼女が口を押さえたのである。

「そんなこと言わないの 自由がある翼わね、いっぱい羽ばたかないとね勿体ないんだよ？ キミはそれを持つてるんだから」

彼女はそうにこやかに答える。

僕は彼女の笑顔にドキッ。と、させる。

彼女の笑顔に見惚れてしまっていた。

！！ッ。正気を取り戻せ！！

「翼はもがれたよ……ずっと前にね」

兄貴に、ずっと前にね……。

僕がずっと1番望んでいた……1番欲しかった翼は。
だから、羽ばたくことなんて、できっこ無い。

「だから……これで、お別れなんだ」

「もつたいない。キミは。飛ぶ力があるのに」

そんなの、僕に存在しない。

ツバサは……もがれたのだから。

彼女はなんでそんな事を言うのだろうか？ 彼女は僕の何を知ってるんだ！！

「キミに僕の何がわかる！！？ キミは本当の僕を知らないだろ！
！ なんでそんなに無責任なんだよ！？ 僕の気持ち！ キミに分かるか！！」

「わかるよ」

彼女は優しい顔で僕に向かい合い。こう、答えた。

『キミのピアノにキミ自信が存在してるんだよ』

と……。

この言葉が頭から離れなくなった。

「キミがピアノが好きな気持ち。いーーーーーっぱい。伝わったよ」

「！」

「キミは人を優しくするほど、綺麗な音を出せるんだよ」

彼女の言葉が全てが僕の『闇』を攻撃していた。

1言1言が僕を光へ誘う。

僕も……アソコへ行けるのだろうか？

八神の落ちこぼれの……僕が？

ずっと、光に当たりたかった。

ずっと、光に当たる兄を憎んでいた僕が。

スボット

光なんか浴びれるはずが無い。

自分でも卑屈だと思う。

そして、いつも光の影に隠れるだけの僕が……？

「大丈夫 キミならできるんだから。私が、保証するんだよ？」

「キミは？ 気安く…… 気安く僕の心の中に入り込むなよ！！ キ

ミは何様だよ！！ 僕の……何を分かつてるつもりだよ。僕は！
ピアノをやめるつもりで今日やめたんだ！！ 今更、なんだ！！
！ 僕は……何をしたら……いいんだよ」

初めてだろう、他者に本当の醜い自分を見せたのは。
本音を吐いた事に、自分でも驚いた。
嗚咽が止まらない。

僕は彼女を見上げるしかなかった。

「キミは、神様って信じる？」
「はっ？」

唐突に、彼女が聞いてきた。

「私はね……」

一回間を空ける。

彼女が口を開けようとした瞬間だった。

「あら、見つかったやつた？ つまんなーい」

大きな黒づくめの大男達が入ってきた。
当然イキナリの事に僕はたじたじになる。

「神様はね

ちゃんと居るんだから」

彼女はそう言い残し教室から立ち去った。

「俺！^{いおり} おーい。起きてるかあ」

僕の頭の中から彼女が消えることが無かった。

^{あのひ}昨日……僕は彼女が気になり、音楽室から出ていった時にすぐに彼女を追うようにでて行った。

しかし、影すら消えていた。

「俺！ 無視しないでくれ！！」

「ん？ 羽岡か……」

「羽岡か……。じゃ、ねえよ！！」

コイツは羽岡博十。^{はねおかはくと}僕の友人だ。

サッカー部のエースストライカーだ。コイツの力でサッカー部は国立で優勝。名実ともにサッカー部の救世主だ。

2年を差し引いて1年生がサッカー部のキャプテンとなった。

人望も厚く人情に弱い。

どこぞの主人公なんだか。

現3年生も納得してるらしい……。

「俺」 頼みがあるんだけど？」

「数学の宿題か？ ったく、持って来い教えてやるからよ」

「さっすが！ 持つべきものは頭が良い人材もとい！ 親友だよな
！」

羽岡は自分の机に向かい、筆記用具を用意する。
後ろに人の気配があるので振り返って見る。

居たのは、クラス委員長の東雲^{しのめ}ゆかり……僕の女友達だ。

「東雲もかよ？　ったく、すっかり頼むぜ委員長」

「いいじゃん　私は写させてもらっけど」

「あ、ズリ　ぞ！　東雲！！」

「早いもの勝ちよ！」

「オレが先に俺にお願いしたんだぞ！！」

「いいじゃない」

僕の席の前で喧嘩しないで欲しい。
うるさい……。

「「俺！！」」

とばっちりも要らん！

「うるさい！！　お前等2人とも教えてやるから座れ！！」

「「は、はい！！！！」」

チャイムが鳴るまでの10分弱。

僕は羽岡、東雲と数学の宿題を手伝っていた。

僕の隣の席が空いてるので机を付けて。東雲を座らせる。
もちろん羽岡^{ヤロ}は地べただ。

知っていたがこいつ等、まったく数学ができなかった。
ために小学生にも分かる問題を出す。

< 1 1 9 2 2 9 6 2 × 6 4 8 9 2 2 9 9 × 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ×
0 >

を、だしてみる。もちろん答えは「0」だ。

どんなに大きな数に0をかけても答えは0になるからだ。

それを、あいつ等ときたら……。

羽岡博十<数え切れないほど>

東雲ゆかり<庵もすぐにできなくせいにな……>

なのだ。……頭痛薬ヲクレナイカ？

2人共数字じゃないし……

しかも、東雲のヤツ……僕を馬鹿にしてるな。ってか、愚痴か？
愚痴なのか！？

「はあ」僕はココにも絶望した。

「転校生を紹介するぞ」

大野がSHRが始まった途端、そんな事を言った。
当然、転校生だ。クラスが騒がないはずじゃない。

「男ですか？ 女ですか！？」
ヤロー

と、男子。

「喜べ男子、女子だ」

と、大野は答える。

男子は歓声を挙げる。女子はなーんだと落胆する。

「可愛い子ですか？」

と、羽岡が質問する。

「ハッキリ言うぞ……」

一同が息を飲む。

たつぷり10秒ほど溜めて大野が口を開く。

「絶世の美人だ」

[illegible]

最後の方、男子が壊れてないか？

「入れ」

大野が短くそう言う。

「はい」

澄みきった女性の声だった。

ガラガラと、扉が開く。

あんなに騒がしかったクラスが、一気に静まりかえった。

「**神崎魅瀬**です」

僕はハッとした。

彼女は……昨日の？

「魅瀬さんは、3ヶ月だけ親の事情でこの学校に転入することになった。短い間だが仲良くするように」

大野の言葉に誰も反応しない。

クラス中が彼女……神崎魅瀬に見惚れたためだった。

男女構わず見惚れてしまうような完璧なその容姿に……。

白髪しじがと言うより汚れの無い純白はくはつが似合う白髪

紫外線すらも見惚れて、与える事を忘れてしまったかのような白い髪に白い肌。

僕も……その内の一人だ……彼女に見惚れた

白髪の髪が太陽の光を受けて普段より輝きが増してる……かもしれ
ない

幻想的……

それが、第一印象だった。

「席は……そうだな。八神の隣が空いてるな」

「先生！！ 僕の隣の席も空いてますよ！！」

「下心があるヤツの隣にはさせんよ」

クラスが笑いに包まれる。

先生……僕が女に興味が無いって遠回しに言ってますんか？
それって果てしない勘違いですよ？

と、ツツコミを入れてる間に彼女が近づいていた。

「久しぶりってか昨日ぶりだね？ 『庵』」

！？ ボクの名前を知ってる？

「なにっ！！ 彼女を知ってるのか八神庵い！！」

僕達はいつもの場所で昼食をとっている。

メンバーは。僕、羽岡、東雲、なぜか五十嵐である。

「ふん。乙女心もわからぬクズが何を」

「鈍感なヤツって罪だよな……五十嵐」

「何が言いたいんだよ？」

「「「………」」」

「3人共黙るなよ……」

僕がいったい何をしたというんだ？

「あ、そうだ。東雲？」

「………」

く、黙るなよ。

「頼まれてた、映画のチケット。頼まれてたヤツ手に入っただけど。それが、卓兄さん、何を勘違いしたか2枚くれたんだけどさ、一緒に「神崎さんで行けば？」はっ？ お前が欲しいって言ったから」

「私なんかより神崎さんの方が良いよ？ 神崎さん美人だしさ？」

「し、東雲？」

なんで怒ってるんだよ？

僕なんかやっちゃいました？

こうして僕は、東雲をあやすのに昼休みを使いきった。

クソ野郎……

神崎が転入してから2ヶ月近くたった。時期は真冬の12月

「「俺　お昼一緒にたべよ」」

神崎とゆかりが同時に誘ってきた。
2人共睨み合ってる……後ろにサルとイヌが見えるのは気のせいだろう。

僕が東雲をゆかりと下の名前で呼ぶのにはワケがある。

たしか、神崎が転入してきた時だったか、ゆかりが何故か怒ってた時だったな。

あの時、頼まれてた映画のチケットをゆかりに渡そうとしたんだけ
と言うことを無視しやがって、なんだかんだあって僕がゆかりを名
前で呼ぶことでなんとか和解したのだ。

今から思い出すと懐かしい。

そんな干渉に浸る暇はこの2人が与えてくれないのだ。

「俺は1年の時から私達と一緒にお昼を食べてたの!!」
「たまにはいいんじゃない? 他の人だって?」

何回このやり取りを繰り返してるんだよ?

1ヶ月ほどこのやり取りを何度も僕の前でやっている。
他のクラスメートもこの2人の中には……訂正

「魅瀬ちゃん。八神庵なんかほおっておいてこの、五十嵐遊馬と一緒に」「黙れ!!」「グハア!!　ふふ、魅瀬ちゃん、キミの愛のムチ……受け取った……よ」

血を吐いて、馬鹿五十嵐は倒れた。
懲りないやつだ……。

「はあ」

今日も果てしなく絶望するのだった。

そんな時だった。

「八神い!!」

担任の大野が罵声を挙げて教室に入ってきた。

「なんですか？」

助かりました、大野先生。
内心大野に感謝する。

「お兄さんが……悠一君が交通事故にあった!!」
「！　兄貴が？」
「意識不明の重体だそうだ」
「……………」

兄貴が……死にそう？

自分の心がどちらに片寄ってるかわからなかった。

兄貴を恨む自分と。

すでにピアノをやめて普通の兄貴の弟である……僕。

自分がだちに片寄ってるか自分でも何がなんだか分からなかった。

この日僕は早退して操姉さんの旦那が勤める病院へ急いだ。

「……悠一兄さんは？」

「生と死の1枚皮……」

操姉さんはそう僕に向かいそう言う。

僕は「そう」と、だけ軽く言う。

長椅子に腰を落す。

僕はただ見るだけ

今後の展開を……。

ただただ、見るだけ。

心の闇と孤軍奮闘しながら……

兄貴は一命を取り留めた。

ただし、当たり前所が悪かったらしく、兄貴の左腕が使い物にならなくなった。

別に兄貴は右利きだから別に生活に支障は無いが。

ピアノが出来なくなった。両手で弾くピアノだ……片腕では弾くのは無理だ。

やろうとしたらできる。でも……それは編曲をしなければ不可能だ。兄貴ならできる……才能があるから

「諦めるよ。悔しくもない」

僕は兄貴のその一言でカチンと、きた。

「ふざけるな!!」

「落ちつけ! 俺!!」

卓兄さんが僕を羽交い締めにして押さえるが僕はそれを払いのける。

許せなかった「ピアノを辞めるの?」

と、聞いたら兄貴はそう即答したからだ。

自分の才能に嫌気が刺しあんなに好きだったピアノを兄貴に譲り……。

凄く悔しかった。

ピアノを辞めた次の日にはただ手を見てることと、彼女の言葉し

か頭に無かった。

「才能があるのに！ あんなに練習したんだろ！！　なんで、即答できるんだ！！」

「俺！」

卓兄さんが制止するが僕は止まらない。

「なんで、すぐ諦めれるんだよ！！　なんで、悔しくないんだ！！　？」

「始めから、ピアノをやる気は無かったからだ」

「悠一も！」

身体中の血が頭に血液が熱く。灼熱の炎のように熱い血が僕の頭に昇って行く。

悔しさが、憎しみが、人間の不の感情が全て僕の身体を駆け巡った。そして、頭の血管が切れた音が脳内に響いた。

「やる気が無かったのに、僕からピアノを奪ったのかよ……」

「……………」

「俺も悠一も！！　落ちつけて！」

「卓兄さんに僕の気持ちかわかるか！！」

僕は卓兄さんに罵声を挙げる。

「あんた等、ここは病院よ？」

操姉みさねさんが入って来た。

その時、卓兄さんが説明しようとした時、力が緩んだ。

僕は卓兄さんを払い除けて病室を飛び出す。

僕は……ただ……闇雲に駆けていた……。

後編

商店街を抜けてから、雨が降り始めた。
服が濡れ、靴までも濡れてしまってる。

身体が重い……。

疲れた……。

身体中が熱い……。

雨足が強くなっていく中、僕は行くアテも無く僕はずっと走って
いたのだった。

途中で勢い良く転ぶ。

立ち上がろうとするが力が入らない。

走る気力さえ無い。

服が濡れて気持ち悪い……。

目から、雨以外の水が手に生暖かく……じつとりと。

何粒も何粒も……目から落ちていった。

暫らくして立ち上がる。

そのまま路地裏にひっそりとしていたネコを見つける。

「お前も……1人……イヤ、1匹か？」

「ニャー」

「そうか……そ、うか……」

ネコがこちらに近づく。

僕の目の前に座る。

「シャー」

ネコは再び路地裏に歩いて行く。

「付いて来いつてか？」

「ニャー」

僕はネコにつられて路地裏にひっそりと佇んだ。

「1泊ありがとう」

ネコにそう言い僕はその路地を後にする。

「ニャー！」

またな！ そう言いたいのだろうか。

野良なのにやけに懐くじゃねーかよ。

僕は気が付かないうちに口元を緩めていた。

「・・・・・・・・・・」

昨日とは違い雲1つもない快晴の空……。

僕は足を進める。

当然、アテも無く。

……でも、冬だからめっちゃ寒い……んだが？

財布の中を確認する。

12000円……十分ある。

今後泊まる際はネットカフェを使おう。

2週間ぐらいはもつだろう。

「俺!!」

呼ばれたので振り返る。

歩道橋の階段で羽岡と、ゆかりが居た。

逃げ様と思ってたら逃げれていた。

だけだ、逃げ様と思わなかった。

2人が近寄ってきた。

「俺！ 卓さん達探してたんだぞ!？」

「ノープランで飛び出すなんてアンタらしくないじゃん!？」

「そこじゃないと思うぞ……ゆかり?」

僕はちゃんとツツコミを入れてやる。

「服もこんな濡れて……」

「雨の中走ったからな」

僕は自分のポケットから【アレ】を取り出しバレないようにゆかりのバックに入れる。

「俺、帰った方が良い」

羽岡が心配そうに聞いてくる。

「……そうかもな」

「なら！」

「……でも、帰ったって何も無い」

「いお……り？」

ゆかりが驚いた顔で僕を見てきた。

「僕にはピアノも……何もかも！！ 全て！！」

「お、おい。俺？」

羽岡が手を差し伸べるが僕はそれを払いのける。

「僕は2ヶ月前……僕の全てを消し去った」

「お前等に、僕の気持ちはわからないだろ」

「……」

「俺？ なんで？」

「……」

羽岡は黙り、ゆかりは僕に質問する。

僕は黙るだけ。

「僕は、お前等を本当に友達と思ったことはないんだよ。」

「なれなれし過ぎなんだよ！！」

それだけ言い残し僕は反対方向に走り去る。

前にも1度、こんな事があつたはずだ。
そうだ、神崎魅瀬……あいつだ!!
アイツと初めて会つたあの時だ。

人の心境を見抜いたアイツなら……。

この、深い闇に落ちた僕を……救ってくれる。

そう、思つた。

……ただ……なんとなくだけでも。
根拠も……何も無い

『キミのピアノにキミ自信が存在してるんだよ』
彼女の言葉が僕の思考の中に蘇つた。

「……しまったな、ノープランすぎたか」

住所がわからなければ意味が無いじゃないか。
ご利用は計画的に。の、CMを思い出す。

そうですね……。

そうだ……

こんな時にこそアイツじゃないか!

僕は近くにあつた公衆電話に入り、アイツに電話をかける。
テレホンカードを入れてあいつの家に電話をする。

「五十嵐だな」

『キサマは八神庵かあ！？　なんだキサマ！？』

「落ちつけ馬鹿」

『馬鹿とはなんだ！？　遊馬様と呼べ！！』

「で、五十嵐聞きたい事があるんだが」

『無視か！？　キサマに耳はないのか！？』

「アホ、耳がないとキサマの声が聞こえないわ」

『ああ、そうか』

「納得してどうする？」

『つたく、お前が電話するんだから重要なことなんだろう』

「……そんなに重要じゃないな」

『おい！』

「まあいい。神崎の家の住所を教えて欲しい。お前ならしってる？」

『魅瀬ちゃんのお前にはゆかりちゃんが居るじゃないか？』

「どついつことだよ？」

『お前等付合ってるんじゃない？』

「誰がそう言っただよ？」

『オレ』

「テメーかあ！！」

いろんな事があつたが神崎の住所をてにいれた。

神崎に会えば……。なにか、大きく変わるような気がした。
いや、期待……。なのだろうこれは。

n o n o m e

Y u k a r i S h i

「・・・・・・・・・・」

私は布団の中でずっと泣いていた。
俺の言葉が胸に突き刺さっていたのだ。

『お前等に、僕の気持ちはわからないだろ』

私は本来の庵を見ているつもりだった。けど、あの時の庵は私の知らない庵だった。

全てを受け入れず。すごく、冷たい目をしていた庵だった。なにも、隠してないのがわかった……17年近くも一緒だったのだから。

私は初めて全ての感情を表に出した庵を見た……。

私だけでもない……羽岡ですら息を呑んでいた。

私は庵を知っていて庵を知らなかったんだ。

それが、凄く悔しかった。

もしかしたら、私があゝの庵さえ……知っていれば……こんなことにはなっていなかった。

そう、考えてしまったから。

あんなに、近くに感じていた庵が……消えていた。

<ピンポーン>

下でインターホンが鳴った。

庵かもしれない！？ そんな、勘が私の中に駆け巡った。急いで、階段を降りて玄関のドアを開ける。

ゆかり……

そんな幻聴が聞こえた。

「ゆかりちゃん！！？ 庵は！？」

玄関の前に居たのは、俺ではなかった。
八神の長男の八神卓さん^{やがみすぐる}だった。

「す、卓さん！？　なんでここに？」

「俺は！？　俺は居る？」

その言葉の真意が私にはわからなかった。

「GPS！　俺のケータイ……っはあ」

「！　俺の携帯にGPSがついていて、それを辿ったらここに？」

「そう！　俺は？」

なんで？　なんで俺の携帯のGPSがここで反応してるのよ？

私はそれを繰り返すのみだった。

すぐに自分のポケットから携帯を取り出して俺の携帯に電話をかける。

卓さんに上がってもらって発信源を探る。

反応は私の部屋であつた。

私のハンドバックの中で俺の携帯は鳴り響いていた。

いたい……いつ、私のバックへ？

私は幾つかの疑問符を頭の上へ挙げていた。

「東区3丁目……ここら辺だよな？」

僕は未だに神崎の家を探していた。

昨日の汗と雨と、さらに今日の汗で服が本当に気持ち悪かった。

「ん？」

子供が球遊びをしていたのが視界の中に入ってきた。
そんなに珍しくは無いと思うが危ないなあと、思った。

ここは歩道が狭くて車の通りが結構多い。

しかも丁字路だ、もし……ベタな展開があれば……。

ヒヤヒヤしながら僕は子供を見ていた。

案の定だ。子供はボールを取りこぼし、球は公園から毀れて、車道にでる。子供は道路へと取りに向かう。

「……ッ」

子供からは視野に入っていないだろうが、子供の反対側に居た俺からは視界に入った……。

トラックだ。

おいおい……上手く行き過ぎだろ！？

体が一瞬、硬直した

「危ない！！」

「？」

ボールを取って大きな声をだした僕の方向をみて立ち止まる。

「ちい！！」

硬直していた身体を無理矢理働かせ、全力で駆ける。
もつと速く……速くしないと！！

赤の他人でも……死なせて為るものか！！

<ドオン！>

その轟音は周りに響いた。

n e o k a

H a k u t o H a

「……………」

オレは俺を自分に例えて考えていた。

もしオレが……サッカーは好きだけどドヘタで才能のある親友……いや、弟の雄祐^{ユースケ}で考えてみようか。ユウがサッカーの天才となっていたら？

幼少の時からやっていたものを好奇心でやり始めた弟が才能を開花させる。

親の目は弟に向いて、監督も、友人もユウしか見えなくなる。

そして、オレは……オマケ扱い……。いや、『落ちこぼれ』なのだろう。

……俺はこれ以上にも悔しかったのだろうか？ 才能があったオレにはわからない。

オレだったら凄く努力してがんばろうとする。
もちろん、ユウの方も力をつけるけど。

俺は人が良すぎるんだ……。

オレだったら譲れない。

譲りたくない。

考えただけでも……憎くなった。
帰ったら苛めてやる。

……俺は、それを譲ったんだよな。アイツは……優し過ぎなんだよ。

『危ない!!』

そういう少年……歳は同じぐらいだろうか？ 少年が叫ぶ。
ユウが居ない!!

さっきまで、野球の練習をやっていたユウが忽然と姿を消していた。

イヤな予感が全身を駆けた。ここの歩道は狭いんだ。

「ユウ!!」

公園から勢いよくオレは飛び出すが……直後。

<ドオン!>

その轟音は辺りに響いた。

I o r i Y a g a m i

僕はどうなったのだろうか？ あの子供は……助かったのかな？
僕の思考の中に、それが残った。

助ければ……良いなあ……。
そう、考える。

——自分の生死より他人の心配をするんですか？

どこからか、幼い少女声が聞こえた。いや、頭の中に響いた。

「？ お迎えかな？ どうせこんな声が聞こえるなんて僕があの子
供を突き飛ばして僕が弾かれたんだろ？」

人間にしては、理解が速いじゃねーか。

次に、幼い少年の声も脳内に響いた。

「死は受け入れるよ、僕は……」

それが、1番……本当に楽なのかもしれないから。

珍しいね？ 普通の人なら死から逃げ出そうとするのに？
「けえ！ 新手のMかよ。」

「んだと？」

「この、馬鹿が失礼なことを言っ
てすみません。
馬鹿言うな。」

「こいつ等……馬鹿か？」

「聞いていいか？ 君達はなんだ？」

“生と死の最終審判者です（だ）”

「私は俗に言う天使

オレは悪魔

2人の声が重なった……仲が良いんだか悪いんだか？
「つてか、天使と悪魔……なあ……」。

「死でいいよ」

――自殺志願者？

「そうじゃない」

自殺なんかしたくもない

――じゃあ、なんだよ？

「僕は必要のない人間だから……誰からも、僕を僕として見ないから」

暗いトーンで話しかける。

誰も……僕のことを必要としていないのだから。

――良いの？ 泣いてくれる人も居るんだよ？ 帰りたいとも……
他の連中と違って即断できるから楽じゃねーかよ。

「僕はね……なんも無いんだよ」

――なにも……無い？

天使の声が質問してくる。

「僕が唯一……本気になったものが奪われたんだ……だから、何も
ない」

――唯一……本気になったものだあ？

「ピアノ……だよ」

—— ピアノ……綺麗な音色ですよ。

「だよな」

—— そうかあ？ オレはギターとかの方が好きなんだけど？

—— あんたねえ……。

「ギターも好きだよ……ってか、音楽は大好きだよ……、ま、兎に角……僕は『死』を選ぶよ」

—— いいの？

天使の声が僕を探る。

僕の決意は揺るがない。

まあ、神崎と話せなかったけど……どうでもいいや。

—— LAST - JUDGMENT。

悪魔の声が聞こえる。

僕に、最後の審判が下されようとしていた。

Y u k a r i S h i n o n o m

e

「……………ウ……………ソ、だ」

目の前が真っ暗になった。

なにも、考えなくて、ただ……胸が痛いだけで。

私は無意識のうちに足を崩していた。

八神庵が、交通事故にあったのだった。

意識不明の重体……

「東雲!!?」

どうやら……私は倒れたらしい。

冷たい床の感触がした……

最後に、羽岡が私に駆け寄るのがわかった。

けど……それだけ。

Y u u m a I g a r a s

h i

「八神……庵が……?」

「はい。お坊ちゃま」

僕は……自分の奇立ちが隠せなかった。

アイツからの電話でただ事じゃないことはわかっていただろう!?
あの、朴念仁で落ちこぼれで……と。挙げたら限が無いほどイヤな
ヤツだった……

けれども。

八神庵は最高の好敵手^{ライバル}なんだ。

アイツが居なければ僕は暇つぶしもできない。
死ぬなら別に良いが。死ぬなよ！ 八神庵！！

「お父様の、知り合いに名医がいたよな？」

「はい。五右衛門^{ごえもん}様です。奥様がお坊ちゃまをお産みになる時に危険な状態になったお坊ちゃまを無事に生還させたお方です。たしか、緊急病院の名医だとお聞きしています」

「わかった。八神を助けてくれと伝えてくれ」

「わかりました。旦那様にお伝えします」

そう言いメイドが下がった。

……なあ？ 庵……。お前が居ないと、競い合う相手が居ないのは寂しすぎる。

I o r i Y a g a m i

最後の審判が僕に告げられようとしていた。

——審判……完りよ「ちょっと、待って。メルにメア」

審判に待った！ と、いう声が『聞こえた』

！！

何故、あなたが？

この2人とは違って……聞こえたのだ。
しかし、この声に聞き覚えがあった。

「神……崎？」

この声の主は、神崎魅瀬の声だった。

「やあ、俺」

しかも、本人だった。

「信じがたいがお前は神様ってこと？」

僕は胡座を掻きながら神崎に問い掛けた。

「キサマ！ セレナ様に対してお前とは……！！」

この口生意気なガキはあの少年だ。
茶毛の小学生くらいの男性。

セレナとは神崎の真名（本名）らしい。

「こら。メア！ セレナ様の御前でそういうのは口にしないの！」

と、クソガキに注意する少女はメル……淡い光のような金髪の小
学生くらいの少女である。

「いいのよ」

と、だけ神崎……イヤ、セレナ様が仰る。

「ねえ？ 本当に死んでいいの？」

「神崎……じゃなかったな、セレナ様。僕はすでに決断しておりま
した」

にこやかに笑顔のまま僕はセレナ様に返す。

みるみる内に頬を膨らませる。

「神崎でいいよ」

「神様ですから」

「キサマ！！ 神崎様の頼みすらきけないのか！？」

「アンタに言ってない言ってない」

と、メルが返す。

「……はあ」

神崎はため息を落す。そして、真剣な目で僕をみてきた。
僕は笑顔を消し。真剣な顔で神崎に向かい合う。

「……僕はまだ、死ね無いんだな？」

「！」

「肉体と魂が離れ切れてないんだろ？」

なんとなく、感じていたことを口にする。3人の表情を見る限り
正解なのだろう。

絶望的な状態には変わらないのだろうか。

「そうよ。俺は……正確には生きている」

「やっぱり……か」

僕はそう呟くだけ。

「……ま、完全に魂と肉体が離れるまで待つてろよ」

と、メアが呑気に言う。

「神埼……お前が神ならよお……頼みたいことがある」
「ん？」

「兄貴の……悠一兄さんの腕を直してくれないか？」
「……………」

神崎の目が真剣そのものになる。
アイツの視線がオレから外れない。

「どうして？ キミは恨んでたんじゃないの？」

神崎が僕に聞いてくる。

「確かに、僕は兄貴を恨んでるよ。自分勝手な兄貴を……けど、尊敬……嫉妬でもあるんだ」

「嫉妬？」

神崎の代わりにメルが僕に問い掛ける。

「才能だよ。誰もが思うよ……天性の物なんだから。僕は、誰よりも兄貴を尊敬してるんだよ。僕とは違って金賞を取る兄貴を僕は尊敬してたんだ。そして、僕もあんな才能が欲しいと……願った。でも、才能と努力は違うって……最初から知っていたんだ。だから……兄貴がピアノを辞めるって聞いた時には怒ったさ。よくよく考えるとさ……何時の間にか……本心は、兄貴を事故に合わせたヤツを恨んでたんだよ……尊敬していた人物を奪われたのだから。本当は、兄貴の事が……大切だったんだって」

「……治ったって悠一さんはピアノを辞めるわよ」

相変わらず、僕から視線を外さない神崎が僕に……そう告げた。

「……………」

神崎の次の言葉は……なんとなくわかっていた。

「兄貴は……僕を執念の力っていうのかな？ 兄貴は自分もピアノをやってライバル心を持たせようとしたんだろ？」

「……ええ」

とだけ、神崎は軽く答える。

普通逆効果だろおが……

「……。気に食わないんだよ。やれるなら僕はその実力をだして
たさー!!」

「出しても、お前の兄貴には勝てないんじゃないか？」
「メア!!」

メルがメアに注意する。

確かにそうかもしれない。いや、そうなんだろう。

「でも！　僕はね――」

ブローグだけど、終わり

「俺……オレさあ。高校卒業したらイタリアのセリアAに行ってみようと思うんだ」

サッカーボールを上手にリフティングしながら、羽岡は僕にそう告げる。

これは、高校生活最後の春の事だった。その時、僕は大学の進学も決まり安定した時の事だった。

「そうか。お前はウチのサッカー部の救世主だもんな」

まだ、寒さが抜けないので、僕はトレーナーを着ている。

羽岡の蹴ったボールが僕の足元に転がる。それを、つま先でボールを上げてリフティングする。

「2年の冬……覚えてるか？ あの時はいく月なのに雨が降ってたさあ。まあ、明日は天気良かったけどな。それよりよあ？ お前さ「僕はお前達を友達だなんて思ったことはない」的な事言ったよな」「うん」

僕は軽く答える。あの際の僕は本当に荒れていたから……。それに……精神的に不安定だから。言い訳にもならないけど……。

「オレさあ、やっぱり人の気持ちってわからないんだよな。お前がなにを考えてるか悩んでた……」

「悪い。あの際の僕はあ——……言い訳はしないよ。ゴメン」

ボールを羽岡の方に返す。

羽岡は美味しく胸で勢いを殺して足元に運ぶ。

「違うよ、やっぱりオレは馬鹿だ。友達とは思ってないんだら？
なら、『親友』だよなって」

「はは。羽岡らしいじゃん」
「だろ？」

親友……そう、言われた時、本当は泣きそうになった。

あんな、暴言を吐いたのに、この馬鹿は『親友』と呼んでくれた。

「がんばれ」
「ん？」

僕は小声で呟いたが聞き取れなかったみたいだ。
だから、僕は大きく深呼吸する。

「がんばれ！ 『博十』！」
「……あ、ああ！！」

球が高く上がる。顔を上げてやっと見えるぐらいに。
そのボールは僕の手元に落ちてくる。

「その前に英語すらできないだろ？」
「うっ！ 大丈夫だ！ ハートが通じ合う！」
「ふっ。お前らしいな……」

羽岡と分かれて1時間もたたない。けど、僕にはとても長い時間

に感じた。

2年の冬を思い出してたからだ。

今でも、思い出せるよ？

『あの時』の、僕の『答え』……。

「でも！、僕はね……これで良いんだと思うんだ。それが生きていく事で幾度なくあることなんだから。人と人は当然それぞれ違う、それを分かっているから。人は……人なんだよ」

拳を強く握り締める。今なら、人生最高の握力を出してる感じがする。

「当然の事なんだけど……人は劣等感を覚える。「アイツに出来てなんで僕が出来ないんだろうか？」「僕の方が優秀なのになんでアイツが出来るんだ？」そう、考えてしまう。僕みたいに」

飽きることなく、僕は続ける。

自分でも、久々にいっぱいしゃべってる。

「そう……完璧じゃないと許せないんだよ。人間って馬鹿だからさ。1日……頭を冷やしたよ」

「僕は僕だから僕のままでもいいんだって」

「だから、知ったんだ。僕は僕らしく生きればいいんだって。僕は出会ったネコみたい……自分の居場所すらないのに、他人の居場

所を作ってしまう馬鹿なんだって。そして、ピアノが大好きな阿呆なんだってさ」

特上の笑みで僕はそう言う。

「俺は優しすぎるよ」

神崎がそう呟く。

「欲張りと言わないよ。僕はどうなってもいいからさ。兄貴の事…
…頼んだよ」

「それでいいんですか？」

メルが僕に質問してくる。

「僕は半分が死人だろ？」

「正確ではないけど。身体のほうが魂を切り離れた時点でアナタは完全な死人。死なない限り私達は本題に入れない」

「……そう」

僕が犠牲になれば兄貴が助かる……考えが甘すぎたか。

「なあ、神崎？ 人には必ず価値がある……僕は……新しい自分を
捜そうと思うんだ」

もし……生きていたのなら……駄目なら、生まれ変わってからさ」

僕がそう、答えると。

神崎の手の平が僕に向かってきた……

ケータイが鳴った。人が折角思い出してるつつーのに、ダレだよ？

「はいはい、僕の思考の邪魔をする馬鹿は誰ですかあ〜？」

『・・・・・・・・・・』

「悪戯なら切りますよ？」

『・・・・・・・・・・』

お、おかしい？ 何故黙るんだろう？

恐る恐るケータイの画面を覗いて見る。

<東雲ゆかり>そう、出ていた。

「ゆ、ゆかり??」

『私、邪魔あ？ 俺い…………』

「なんで涙声なの!? 僕が悪かったからさ! ゴメンって!」

『俺の馬鹿あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!! ぷっっ』

切られた。どうしよう、怒ってるよな〜。

…………まあ。

どうでもいいか

布団の中に入ろうとするが、またもやケータイが鳴る。
手にとって着信を確認。 <東雲ゆかり>と出る。

「なんだよ?」

『ゴメンね 俺〜〜〜〜〜〜〜〜』

「煩い。なんのようだ? キサマも呼び出しか?」

「超能力者か！！？ 超能力の才能あるんじゃないの！？」

くっ。どいつもこいつも……。今日は厄日か？

「**んで、何処に行けばいいんだ？**」

学校

「忘れ物だなんて言ったら、友達の縁を切るぞ」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

↖

↗

「さよなら、ゆかり。この3年間楽しかったよ」

僕は携帯の通話を切ろうとする

[illegible]

携帯からゆかりの絶叫が聞こえた。
しぶしぶ、言い訳を聞くことにした。

「なに？」

『なんでわかるのよお？　じゃない！　今、切ろうとしたでしょう！　ちよつと！　話を聞いてよお。忘れ物もそうだけど、庵に会って話したいの』

「まったく。今から行くよ」

僕は、また一階に下りて。「出掛けて来るから」と、親に伝えて玄關へ

お気に入りのスニーカーを履いて外にでる。
そして、歩きながら僕は学校へと足を進めた。

校門前に差し掛かった。

校門ではゆかりが待っていた。

なんだ？ 念入りに髪を手入れしてる？

まるで、デート前の乙女だな

「おい。さつさと終らせて帰っぞ」

「う、うん！」

ついた場所は音楽室だった。どうやら……この馬鹿の魂胆は……。

「ね、ねえ？ 庵？」

「……お前……忘れ物は口実だろ？」

「デヘッ」

忘れ物を口実に……また、僕にピアノを弾かせて……またピアノと向き合って欲しいって事ね

ご丁寧に……羽岡に五十嵐も居やがる……。

「お前等も隠れるなよ……バレバレ」

「ちい。折角庵と話してセッティングの時間を稼いだってのに」

「完璧だったのに……クソ」

第一あんなに速く次から次へとくるかってんだ。

「俺……」

「はあ。1曲だけだぞ？」

そうだなあ……。

何を弾こうか？

そうだ……これが、自分らしいのかもしれない……

フランツ・リスト作曲

「詩的で宗教的な調べ」第3番

【孤独の中の神の祝福】

そういえば……最後に弾いたのも……コレだったな……。

終りがコレで……始まりもコレか……

この譜面は頭の中にある……。

うん。弾こう……コレからも。

ずっと……

なあ？ 神埼……？ コレで良いのか？

アイツの言葉を……思い出した。

最後に……アイツはこんな事を言っていた。

『ツバサが折れたから俺は空に向けないんじゃないの。俺はね、お兄さんと戦うコトを恐れた勇者なんだよ。ツバサが折れたコトを言い訳に、お兄さんとピアノと向き合わなかった。死を受け入れる勇気があるなら……お兄さんとピアノに立ち向かう勇気はあるよ。自

分の道を自分で曲げちゃ駄目なんだよ……俺には俺の音があるよ？
自信持ちなよ。』

この、曲同様に……

僕の孤独の中に神崎が居たそして、彼女が救ってくれた……
これは……本当に僕らしい……曲だ。

前に進めないRPGは……全クリは不可能なのだから。

前に歩こう……魔王たる兄貴を超えるために。

行つてやるさ……待つてろよ兄貴……

僕も、ヨーロッパの舞台に立つてやるからな。

まずは……ここから始めて……。

孤独とはあり得ない、心の内に必ず一人は居るんだ
自分を照らして前に押してくれる孤独の中の神様は
自由のツバサで、高みの空へとも、押してくれる。

それを、みんなと出会えてわかった。

神崎だけじゃなくても……みんなが、僕の孤独の中の神の祝福と
なる者達なんだ。

前へ後押しを受けよう……素直になつて。

鍵盤に自分の思いを乗せて弾き始めた。

やっぱり僕は……ピアノが好きなんだ

これが、僕の物語……終って始まる……
間逆の物語……

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8937d/>

自由のツバサ ~loneliness in god blessing~ 連載バージョン

2010年10月24日14時00分発行